

郷音キ

No. 95

〒590-0959

日本キリスト教団 堺川尻教会

堺市堺区大町西三丁目一、十三

☎〇七二・二三三・三三三

「彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、

イエスは、『ここに何か食べ物があるか』と言われた。そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた。」

(ルカ福音書二四章四一〜四三節)

右の聖句は、十字架の死から復活された主イエスが、弟子たちの所に来てくださった記事です。主は、主の復活を信じられない弟子たちに、焼いた魚を食べてみせられるのです。

キリスト作家の故椎名麟三氏は、この聖書記事によって回心し、洗礼を受けました。そのことを著書『わたしの聖書物語』の中でこう書いています。

「たしかにそのイエスは生きていたというより仕方のない存在であった。焼いた魚まで食べてみせているのだから…。私がドキンと

したのは、そのイエスは、十字架上で死んだのである以上、死体であるというより仕方がないことに気付いたからである。」

「この生と死が、たがいにおかすことなく同居しながら、たがいにあわれにも唯一絶対のほんとうのものとなることができないで、

真の自由を見た

ルカによる福音書二四章二六〜四三節

しかつめらしくも支えられているイエスの肉と骨とに、私はいままで見たことのない人間の真の自由を生々と見たのであった。」

椎名麟三氏は、死んで復活されたイエスにおいては、生と死がどちらもあわれにも絶対のものとなることができないうるのであり、そこに今まで見たことのない人間の真の自由を見た、と言うのです。「生と死を共にキチンと共存させている本当の生命を見た」とも言

うのです。これはこういうことだと思います。

私たちにとって、生と死は、どちらも時に自分を脅かし縛り付ける絶対者となります。私たちが人間は誰しも、人生がとても厳しく辛く思えることがあります。その時「生きることから逃げたい」「死にたい」と思うことがあるのではないのでしょうか。しかしまた、死が自分にとって避けられないものであることを思う時、恐れを覚え、

塚本一正牧師

「死にたくない」「生きたい」とも思うのではないのでしょうか。全く矛盾したことです。それが私たち人間の現実ではないのでしょうか。そのような意味で、私たちにあっては、生きることと死ぬことは、どちらも自分を脅かし縛り付ける絶対者なのです。この矛盾した二つの絶対者の間で、私たちはある時は「死にたい」と思い、ある時は「生きたい」と思い、その矛盾した思いの中で苦しみます。

主イエスは、このような私たちの救い主として来てくださったのです。十字架と復活の主においては、椎名氏の言うように、生も死もどちらもあわれにも唯一絶対のものとなることができません。主イエスのゆえに、もはや生も死もどちらも絶対者として私たちに脅かし縛り付けることはできないのです。私たちは自由です。私たちにあって唯一絶対のお方はただ一人、私たちを生きるにも死ぬにも決して見捨てない愛の神、主イエス・キリストなのです。

今もなお生きることは私たちにあって厳しいことです。しかしどんな人生の苦しみも悩みも、私たちが主の愛から引き離すことはできません。また、今もなお死は私たちにあって恐ろしい未知のものです。しかし死も私たちが主の愛から引き離すことはできません。私たちは、生も死も貫いた主イエスの大いなる命に生かされているのです。椎名氏の言う「本当の生命」に、聖書の言う「永遠の命」に、私たちが主イエスによって生かされているのです。